

生涯を見通した一つながりの行路としての「キャリア」をはぐくむために

千葉県立印旛明誠高等学校長 浅田 勉

1 「キャリア教育」の「キャリア」について

「キャリア教育」が、高等学校の進路指導の場で広く求められるようになったのは、今から15年ほど前というのが私の実感である。そして、その当時の戸惑いをよく覚えている。「キャリア」という言葉がどうも腑に落ちなかったからである。「キャリア」(career)と言えば、普通はこれまでの「経歴」「経験」という意味で、生徒の将来の夢を実現するための進路指導とどうもすんなりと結び付かなかったのだ。同じような印象を抱いている人は少なくはないのではなかろうか。

少し古い資料になるが、文部科学省が平成23年11月にまとめた『高等学校キャリア教育の手引き』では、「キャリア」の語源を次のように示している。

「キャリア」の語源は、中世ラテン語の「車道」を起源とし、英語で、競馬場や競技場のコースやトラック(行路、足跡)を意味するものであった。そこから、人がたどる行路やその足跡、経歴、遍歴なども意味するようになった。

そして、その上で「キャリア教育」の「キャリア」については、平成23年1月31日の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」を受けて、次のように説明している。

「キャリア教育」の「キャリア」を「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」ととらえることとする。

つまり、「キャリア」は、元々単に過去の「経歴」「経験」だけでなく、これから積み重ねていく「経歴」「経験」も含めた、人がたどる生涯の一つながりの行路を指しているというのである。進路と言うと、まず進学や就職の目標を立ててその実現のために何をなすべきかを学び、取り組むことと考えがちだが、それは本当に極一部に過ぎず、「キャリア教育」は、人生の初めから終わりまでを見通した上で、これまで自分が積み重ねてきた「キャリア」とこれからたどるべき「キャリア」をどうしたら一つながりにすることができるかを見極め、実現していくことなのである。

2 生涯を見通したキャリア教育の実践事例

キャリア教育に求められる前述のような側面を念頭において、ホームルー

ム活動や総合的な探究の時間を活用して実施するキャリア教育の実践事例を以下に示す。

(1) 自分史

自分が生まれてから現在に至るまでの出来事を写真やイラスト等を交えながら、冊子としてまとめる。

作成に当たっては、必ず家族への取材を実施したり、アルバムを見たり、卒業文集を読み直したりするなどして、できるだけ多くの資料を集めて、具体的な内容になるよう努める。

完成した自分史をグループ内で回し読みして、それぞれが簡単な感想を書いて交換し合う。

それぞれの発達の段階で、これまで自分が果たしてきた役割を確認するとともに自らの価値を認め、自己肯定感、自己存在感を高める。

(2) 逆算ライフ・プラン

人生の終末から考え起こして、現在の自分に至るまでの人生計画を逆算的に作成する。

どんな人生の終わり方をしたいか。そのためにはどんな家庭を築いたらよいか。そのためにどんな職業に就きたいか。そのためにどんな大学のどんな学部・学科で学ばなければならないか。そのためには、高校でどんな力を身につけなければならないか。そのためにはどんな科目を選択しなければならないか。

指導者に相談したり、図書館やインターネットを利用して、調べ学習をしたりしてまとめ、グループ内で発表をする。

後述する「職業研究」や「学部・学科研究」の成果を活用する。

また、現在、授業で学んでいる高校の教科・科目を学ぶ本質的な意義に気付かせることができる。

(3) 職業研究

自分になりたいと思っている職業や興味を持っている職業について、具体的にはどんなことに従事するのか、その内容を調べる。また、その職業に就くにはどうしたらよいか、調べて具体的にまとめる。インターネット等を活用する。学習した成果をポスターにまとめ、グループごとにポスターセッションを行った上でポスターを掲示して全体で共有する。

生徒は意外とそれぞれの職業の具体的な業務内容を知らないなので、早い時点で確認しておくことが必要である。

また、例えば、教師になるのには大学を出ていなければならないが、弁護士になるのは大学を出ていなくても可能であるとか、医師になるには大学

の医学部で6年学び、国家試験に合格してからも、研修医としての期間が5～7年間もあるとか、テレビドラマなどを通じて、その職業の存在は知っていても、どうしたら実際にその職業に就くことができるのかについて把握している生徒は思いの外少ない。この学びを通じて、その職業に就くことの困難さを知り、別の職業を目指すことも大きな学びの成果と言える。

一部には、Society5.0の到来によってAI化が進み、なくなっていく職業もあるのに職業研究は意味がないという見方もあるだろうが、だからこそ現在ある職業について知ることが重要で、一つ一つの職業の価値について見極めることは、どういう職業が将来も必要とされる職業なのかを知ることになるのである。

(4) 学部・学科研究

大学にはどんな学部・学科があり、具体的にはどんなことを学ぶのか、進学のためにはどんな試験が課されるのか、どんな入試制度を取り入れているのか、あるいは、どんな資格が取れるのか、卒業後の就職先など、「職業研究」と同様に調べ学習を行い、ポスターセッション等を行って、グループ内及び全体で共有する。

実際の大学選択や出願に向けての予行練習としての位置付けでよく、多くの大学で一般的に設定されている代表的な学部・学科の特徴をつかませる。生徒は、意外に大学の学部・学科の学びの内容、職業や資格とのつながりを理解していないので、早い段階で基本的な部分を押さえておく。

特定の大学が特色ある学部・学科を設定している場合もあるので、そうした場合は、大学ごとにまとめさせてもよい。

(5) インターンシップ

生徒の希望に可能な限り対応する業種の事業所を確保し、就労体験を夏季休業等の長期休業期間を利用して実施する。

事業所の選択は、地域連携の観点から、学校が所在する地域の事業所を優先して行う。継続的に毎年インターンを受け入れてもらうことを考慮して、生徒に対する挨拶や言葉遣い、就業態度についての事前指導を徹底する。

医療、保育、教育関係等、資格・免許を必要とするような専門性の高い職種を希望する生徒については、必ず体験をさせておきたい。自身の適性について気付かせる好機となるからである。

生徒が希望する職種の事業所の協力が得られなかった場合でも、実際の事業所で就業体験をすること自体に意義があるので、協力が得られた事業所の中から体験先を選択させて、就業体験に参加させる。

教育実習と同様に就業体験日誌を作成させ、提出させる。体験の結果を次

年度就業体験に参加する後輩の前で報告する。

(6) 留意事項

ここに挙げた実践事例の一つ一つは多くの学校でも実施している取組であろうが、初めに述べたように、「キャリア教育」を、人生の初めから終わりまでを見通した上で、これまで自分が積み重ねてきた「キャリア」とこれからたどるべき「キャリア」をどうしたら一つながりにすることができるかを見極め、実現していくこととしてとらえた上で、「自分史」や「逆算ライフ・プラン」を手掛かりとしながら、一つながりのキャリア発達学習プログラムとして、これらの実践を有機的に関連付け、体系化して実施していくことには大きな意味があると思う。

それぞれの実践を進めるに当たっては、前年度の生徒が作成した「自分史」や「逆算ライフ・プラン」の冊子やポスター、就業体験日誌の優秀作品を参考として閲覧させると、目標が明確に描けるようになり、強い動機付けとなる。

中には「逆算ライフ・プラン」に大学への進学が入らず、専門学校への進学や上級学校には進まず就職という場合も考えられるが、「学部・学科研究」は、専門学校や事業所等を選択する際の参考になるので、そうした生徒にも是非取り組ませたい。

また、ここに示した事例では、学びの成果を共有するための活動として、回し読みやポスターセッション、発表、報告等を挙げたが、一人一台端末の環境が整いつつあることを踏まえれば、調べ学習の場面だけでなく、学びの成果の共有についてもICTを活用して進めることができるだろう。

3 おわりに

私は「キャリア」と言う時、歩を進めて行く自分の足下にあって、一定の幅を持って背後から行く手に伸びるカーペットを思い浮かべる。生徒一人一人が、キャリア発達学習や様々な進路行事等に目的意識を持って積極的に取り組むことで、ゆったりとした幅を持ち、多彩な文様に彩られた美しいカーペットのような、自分だけの「キャリア」を織り成していくことを期待している。

令和4年8月7日